

の屍とを勳章として與へられたれども、一人は血縁ある王の甥なりき。王はまた容易にふさはしき閣臣を得たり、一人は大佐キルク、一人は判事長ジエフレエスにして、共に苛虐を逞ふし、國民の怨府となりしことに於て知名なる者なり。ジエフレエス就官の日一人に書を送りて、余は今日より叛逆に對して余の勤務を實行すべく、既に其の九十八を刑したりと云へるにても一斑を窺ひ得べし。而して彼等の處刑せらるゝや絞殺にあらざれば奴隸として植民地に賣出さるるなり、ゼエムスは賞として名譽ある二人の屠者にイギリス大法官を以てしたり。

然るに貴族及び僧侶の一部はスチエアト家の尊權を默許せんとせり、そは彼等はなほ一千六百四十八年革命の苦痛を記憶すればなり、然れどもゼエムス二世の公然舊教に歸依することは得忍ばざる所なり、そは僧侶等は宗教改革に盡す所頗ぶる多大にして、舊教の信仰復活は即ち彼等の破滅にして、貴族等はまた僧領地抑壓にするを得たる、巨多の采邑を失ふに至らんことを恐るゝが故なり。加ふるに彼等の多數は憲法政治下にありて、彼等の勢力と國家の利益とに最も適合せる國運の永繼を希へばなり。

永く強勢の國論に反抗せんには極めて恰當なる君主を要す、然るにゼエムスは青年時代に海軍提督として特色を發揮したるに似ず、既に老耄したるものゝ如く、柔弱にしてしかも驟の如く頑迷なりと、兄王の云へるが如く、一途に舊教保護の根本主義を固持して盲目的に進行せり。されば新教國にありては、彼は僧侶に圍繞せられ、セスキト・ピイターに代りて絶對の君主專制を宣言せんが爲に宣誓書によりて舊教徒を免し、使をイタリイに派して舊教と和親を結ばんとするか如くに目せられたり。然り彼は反對せしアングリカン僧正獄に投じ、カンタベリー大僧正を自ら同志六人と共に自ら塔中に籠居するに至らしたる等の所爲ありたり。

かゝる暴行は革命をして避くべからざるものたらしめぬ。是より先オランダ公ウイリアムは已にホイッグ黨首等と結べり。彼はゼエムス二世の養子にして、王儲たるべきものなれども、王がイタリイ人にして舊教徒なる一皇女と再婚し、ウイリアムに先ちて一男子を擧ぐるに至りたれば、公は躊躇するの暇なく、貴族の意向を迎へ、オランダの力を藉りて猶父を壓せんとせり。ルイ十四世は眼前に迫れる危機をゼエムスに告げ、自ら助力せんと通じたるも、驕慢にもゼエムスは好意を拒

否したり。ルイはゼエムスの災禍は其の根源帝王専制にあるとを知ると共に自己の危険をも了知せしかば、否むにも關せず援助を與へんとし、遂行したれども満足すべくあらざりき。即ち兵をミューズ河に出して同盟聯邦を脅迫し、ウイリアムをして余儀なく蟄居せしむることをなさず兵をライン河に送りてセルマンを激動したるに止まりたり。報はオランダを震駭せしめたり、而してウイリアムは直ちに進軍しぬ。

ウイリアムの艦隊は一萬五千人を輸送せり、而かも新教と自由との旗幟を鮮明にして。彼は英國の上下兩院に傳へて、予若し帝位を繼承するに於ては卿等の希望を入れて、國家的法律、國家的宗教を維持せんと宣言せり。彼は聊の抵抗なくロンドンに達しぬ、國民は舉りて既にゼエムスを見離せり、總理大臣サンダアランド、寵臣マルボロオ及び王の第二女デムマルクのアアンすら然りしなり。遂に王は微服して僅に逃れたり、而してロンドン市中は棍棒劍鎗等の端に橙を結びたる行列と、頭に新教徒の色章となれる橙色の布片を附たる群集を以て充滿せられたり。法王教を棄てよ、舊教を滅せよとの喊聲至る所に反響し、舊教寺院の多くは破壊せ

られ、椅子其の他器具書籍等は一處に積堆せられて灰燼となれり。然れども舊教は生命を失はざりき、唯一人のゼエフレエすら全きを得たり。

ゼエムスが逃走せんとして乗込みし小艇の將に解纜せんとするや、舊教僧侶搜索の爲に入來りし數十の水夫等に發見せられ、ゼスキト教徒の微服せる者と認定せられて吟味されんとせしが、ケント貴族中王を知れる者ありて、遂にロンドンに歸れり(十二月)翌日オランダ兵到着す、王は再びロンドンを去らざるを得ざるに至れり、これ遂に永久の別離なりき。ウイリアムは王に面會を許さず、而して特別議會に召集したる貴族等は、ロオチェスタアに一身を委ぬべきことを王に宣告せり。ウイリアムは王が護衛にオランダ兵を附して、彼の逃亡を防守せり、然れども王はフランスに遁れて、ルイ十四世の優遇を蒙りたり(一千八百八十八年)

議會は王位空しきを以て、直にオレンヂ公及び公妃メリイに王座を捧げ、公主アアンをして後嗣たらしめ、ゼエムスの他の血族をして決して登位せしめざることを決議せり。オランダにてはスタッドソルダア家王たり、然れども、ウイリアム三世は即位に先ちて彼の權利宣誓に調印すべく強迫せられたり(八月二十九)

絶對神權を旨とせる君主權の代りに、議會の議決に服従すべき君主權を以てしたる新憲章は、英國民が數世紀間に亘りて要求したるものにして、國民の自由と保證とを意味するものなり。即ち議會の定期召集、租税の制限、王及び議院合意上の法律制定、陪審裁判、及び請願權等はなり、之れ實にイギリスをして永久國家の安全を保護するに足るべき憲法政治の基礎を作らしめたるものといふべし。

これ近き二百年間國民を壓制し來りたる帝王絶對權、就中其の權化ともいふべきルイ十四世に對して人民の新權利を示せるものなり。佛英間に爆破せる激しき葛藤に關しては何等驚くべきものなし、そは全然相反せる二種の利害以外更に全く相乖ける二種の政治的要求の相衝突したるものあればなり。加ふるに十六世紀に於けるフランスは歐洲に於ける新教及び自由主義の保護者たるの風を裝ひ、十七世紀にありては却て國家の獨立と國民の良心とを脅かしたり、而してフランスが一旦放棄したる任務を負擔せんとするものはイギリスなり、之れと同時に三、四世紀間イギリスの忍びたる怨恨、猜忌、嫉妬、を齎らし、且つ商業上の利益を占有し、以て多年面白からず思ひしフランスの勢力を潰破せんと念じたるものは實に

イギリスなればなり。是に於てイギリス國は嘗てフランスがアウストリア家に對する反抗の中心となりたるが如く、ボルボン家に對する各同盟の中樞となりぬ。アウグスブルク同盟戦争(一七八八―一七九一年)とスペイン繼承の戰役

如上の政事的變革はこの戦争のあらゆる事情を顛倒することゝなれり。抑もルイが英王に年金を贈りて相和せし間はフランスの恐るべきものエウロッパ大陸に一國もなかりき。何となれば一方ピレネイ、アルプスの峻嶺をひかへ、他方濤荒き大海に面したる同國は、雙手を舉げてラインの一面に奮闘すれば足る、敢て後顧の要なければなり。然るに今イギリスと離れ、却て敵と結ばれたる上はシエルト、ライン、アルプスに兵備を要するのみならず、大洋遠海にも艦隊の必要を見るに至れり、奈何んぞフランスは長く此の二重の困難に堪るとを得べけん。

嘗て非インナ、マドリット、乃至ロオマに於てだに「精悍奇略の異教徒」と呼ばれたるウイリアム・オレンジ公は今や連衡の本尊となれり、蓋し彼を敗らんとすれば一舉して勝敗を決することゝなるを以てなり。ルイ十四世はゼエムス二世に艦隊を托しぬ、然るに彼はイギリス、オランダの艦隊にあたらずして直にアイルランドに

向へり是を以て兩國艦隊は却て佛將シトウレノオドの爲にバントレイ灣に敗られ、且つツウルザルのためにはサセックス海附近に敗られ、遂に最後の交戦に於てイギリスの十六隻は同海岸に撃沈せられ、或は燒棄せられ、殘餘はテイムス河口及びオランダ海岸に躲避することなれり、時に千六百九十年七月十日。かくて一時ルイ十四世は海上の覇權を握れり。されどゼエムス二世の暗昧なる如何にして彼を援くべきかを知らず、却てポイネの戦に敗走せり、同月十一日、蓋し此の戦敗はカルピニスト黨の烏合の衆と元帥シヨムベルクとの失敗與て力あるものなり。かくてゼエムス二世は再びフランスに歸國せり。是にも係らずルイ十四世は進みてイギリス侵攻を企て、二萬の軍兵をチエルブルグとヘエグとの間に徵集し、三百の輸送船をプレスト港に廻集せしめぬ、而してツウルギルは自身引率せる四十四隻とデストロイがツウロンより廻航したりし卅隻とを護送するの命を蒙りたり。時恰も風向變じて地中海を出たる艦隊は豫定の時限に到着するを得ざりき、然も必勝の念に驅られたるルイ十四世は専ら敵將の不足なるべきを豫想して乗ずべきの機となし、九十九隻よりなるオランダ艦隊を搜索するの命を提督に下せり。

されど豫想全く空虚に屬し、敵艦隊には何等の不足隙にあらざりき。ツウルギルは連續十時間に亘る奮闘を試みしが、翌日に至りては更に再び爲すの氣力なく、もろくも退却するに至れり、而かも運拙く此の附近の海岸には敵の透踵を避くる好灣なく、チエルブルク及びラ・ホウグに逃竄せる十五隻は敵艦の手に委するを潔とせざる、艦長等によりて自燒せられたり、(千六百九十二年)此の大敗は佛軍を全く潰滅するに至らざりしも、豫定の遠征は遂に放棄せらるるに至りたり。

千六百八十八年の初めウイリアム將に遠征に上らんとする時フランス將軍は已にライン河に達し、フリッブスブルグ、マンハイム、及びウオルムスを攻略し、翌年バラチナイトを劫掠せり。爲に此の地十萬の住民は居所を燒かれ、漸く逃れてセルマシに到り、帝に迫りて復讐を計らんことを請へり。帝も亦斯る悲惨の侵掠を憤慨し、遂に宰相ルウボアを慚死せしめたりと傳ふ、(千六百九十一年)而して此の戦線は遂に擴がりてアルプスより北海に達せり、但しライン河畔に於けるフランス軍は専ら防守の策を取りたり、蓋しルイ王は最も弱敵たるサヴォイ公及びスペインに手痛き打撃を與へんと欲したればなり、ためにネザランドは最も猛烈なる急先鋒に揚げ

たるの非運に遭遇せり。

コンデイの門弟ルクゼムブルグは一千六百九十年フリユラスに於て、千六百九十三年スタインカルクに於て、及び同年ニールウインデンに同盟軍を敗り、モンズ及びネムウルを奪取せり。而してカアルロアの攻陥に實に彼が最後の勝利にして千六百九十五年に死せり、ウイリアムはその嗣子に命ずるにネムウルの再侵略を以てしたり。又彼が別軍即ち千六百九十年スタップアルドに勝利を得たるカタナはビイドモントを侵掠し、後マルサグリアの勝利によりてその大部分を占領せり。海上にありてはツウルギル、ラゴスに勝利を得てラホグの敗恥を雪ぎ、ネスモンド、ポアンテ、デユケイトロウアン、ジャンバル及び慄敢なる一群の海賊は英和兩國の通商を阻害せり。

されど戦争は漸く下火となり、フランスは到底角逐し得べからざる苦闘によりてその國力を消費せり。ヴォバン當時の國態を記して曰く、王國の半部は他の半部の慈善の下に生息せりと、加ふるにチャアルス二世は死に垂とし、スペイン繼承

權問題は將に起らとし、歐洲の風雲愈晦溟、實に猛風の來らんとする條忽の間沈靜なるが如く、歐洲は今や大事に際して霎時の休息をなせり。ルイ十四世は千六百七十七年と同様なる政策を襲ひて敵を分裂せり、サヴォイ公は彼が協商に同意し、所領及びビグネロールをも合せて回収し、その女を佛王の孫バルガンデイ公に嫁せしめたり(千六百九十六年)サヴォイ公のこの脱離は餘義なく同盟國をしてフランスの提案を承諾せしむるに至り、千六百九十七年リエッキク會議に於て簡單なる商議によりて平和條約は締結せられぬ。斯てルイ十四世はウイリアム三世を承認し、復合會議の結果ストラッスブルヒ、ランドウ、サアレルイ、及びロングキイ等を除きてフランスに合併したる諸領土を帝に割讓せり、ロオレイン公また領土を再收し、オランダはフランダアの某々地に守備隊を置くの權を獲、コルベエルトの爲めに牽束されたる商業上の制裁を廢止することを得たり。

アウストリア家の嫡系はチャアルス二世の死と共に將に絶えなんとせり。スペインと其の宏大なる所領は果して何人に屬すべきか、茲に繼嗣を争ふ三家あり、曰くフランス、曰くアウストリア、曰くバヴリア是なり、ルイ十四世はフリッパ四世

の長女にして彼が后宮なるマリア・テレサの権利を叫べり、レオポルト一世は小皇女マルギエリテと結婚せり、バヴリア選挙侯は己が男にして同じくマルギエリテの孫の権利を名として要求せり、ルイは初め一般に渡る大戦を敢てするを欲せず、スペインの全領土を各自に分割せんとをウイリアム三世に建議せり(一千九百一十八年)、然るにチャアルス二世は彼等が己を顧ずして恣に他の繼嗣を定めんとするを大に憤り、バヴリア選挙侯の太子に萬事を讓與すべきことを遺言せり、されど太子夭死したれば、フランスとアウストリアとのみ唯一の競争者となれり。ルイ十四世は更に新分割案を提出したり、新提議は必ずしも多くフランスを利するものにあらず、イギリスとオランダには共に同意を表せしも、レオポルトは是を拒斥せり(七年)、是に於てルイ王は策略を變じ、マドリット府駐在佛國大使ハルユウト公をして言論文章に籍りて出來得る限りスペイン人の愛國心に愬ふべきを命じ、應て其の結果輿論はフランスに傾ぐに至れり、カスチイル議會及び法王は佛王の孫アンジウ公を繼嗣として冊立せんことをチャアルス二世に勸誘したり(千七百二十年十月二日)。遮莫ルイは是に到りて躊躇せり、蓋し之れを承認せば勢戦争は避くべからず、

ればとて否認せばアウストリア家を再興することゝなるべく、かくては最早同家は兩分せられず、チャアルス五世の朝に於けると均しく合體すべきものなるが故に、繼承權を分割することは中々に危険なり、加ふるにレオポルトは之れに同意するを肯んぜざるなり。孰れを取るも戦争は遂に免るべからず、然らば一部の爲に戦はんより寧ろ全部のために戦ふに勝かざるなり。

ルイ王の決定是に於て定まれり、彼閣員を召集し、自ら適孫を抱きて臨場し、端嚴に宣言すらく、諸士よ、スペインの王を拜せよと、是より數週日を経て愈出御に際し、彼を吻して次の有名なる語を吐けり、曰く、連山ピレニイス障壁今やあらずと、フィリップ五世の即位は王國人民が歡呼の裡に迎えられぬ。全歐洲は電光に打たれたるが如く、只愕然たりしのみにて、恰かも驚駭の念憤怒の情を麻痺せしめたるの觀ありたり。

然れども戦争は遂に避くべからず、此の時に當りてホルボン家は領土を擴めて、一方セルト河口よりジブラタル海峡に到り、他方オオトラントよりプレスト港に伸長しつゝありき。ルイ十四世は世界を統べて一王國となさんとすの妄圖あり

と傳へられたるもの、今や正に虚妄とのみ見るべからざるに到れり。
 英國の一大政黨ホイッグ黨は、歐洲の自由と人類とを救はんが爲に戦争を要求せり。げに英王の激しき煽動なかりせば、レオポルドいかに勗るも歐洲の連衡を再造すること甚た容易ならざりしなるべし。

ルイ王は第一着手としてネザアランドの要害よりオランダの守備を徹せしめ、フランス兵を以て代へぬ、斯くてホオランドをして憂惧せしめたるのみに満足せず、ゼエムス二世の死に當りて彼の男ゼエムス三世を承認して故らに英國に挑めり、是明かにリスキック條約に背乖せるものなり(千七百〇一年)かくて最後に彼が前約と佛國の利益とに反して新スペイン王にヅエルサユウ朝の嗣に屬する總ての權利と位置とに反して新スペイン王にヅエルサユウ朝の嗣に屬する總ての權利と位置とを保留せしめたり。是に於て乎、イギリスとオランダ聯邦との新同盟はヘネグに於て締結せられぬ。次でプロシア、ゼルマン帝國、ポルトガル及びサヴォイ公(フィリップ五世の義父)に至るまで漸次此の同盟に加はれり(千七百〇三年)。然るに千七百〇二年ウイリアム三世死し、彼の義妹にしてゼエムス二世の女王なるアアン續て立に

及び此の同盟一時潰裂せんとするの觀を呈しき。されど三箇の偉人此の間に出現して辛くも之れを支へたり。三偉人とは何人ぞ、曰くオランダの大宰相ハイレンシアス、英國ホイッグ黨の總理にして大外交家兼將帥たるマアルボロウ及びサヴォイ家の王子ユウゲネ是なり。ユウゲネはフランスに生れたるもルイ十四世の輕侮を受けしより去てアウストリア家に入りし人なり。此等三英雄は互に利害と思想とを隔らし、特にルイ王に對する歴惡の情相投合し、互に提携して戰鬥行爲を執るに到れり。

翻てルイ王を顧みるに、さしもの盛運漸く衰運に傾きぬ、彼はド・マンテノオンを入れて攝政せしめたるも、元來材幹あるにあらず、唯阿諛面従の輩、凡庸なるシャミラアトはルウヅォア並にコルベイルの職を執り、無能のギルロアはテュレイヌに代れり、而して農工業はナント勅令の廢止によりて蒙れる一大打撃の瘡痕尙未だ治らず、加ふるに戰又戰、内には幾多の土木を起し、めために國庫は全く空乏を告げぬ。此の間に唯獨りヅエルサイユ宮の華觀のみ十度の野陣を價するあるのみ。

アウストリアも亦ミラネイの戰勝以來イタリイに反旗を揚げたり。ユウゲネ

王子は一千七百〇一年カルピにカタイナを敗り、次でクレモナを襲ふて半ば之れを略し、ギルロアを擒にしたるも、エンドオム公の爲に千七百二年ルッザラに敗を取れり。同年ギラルズはフリードリッゲンにて陸軍都督の職に就き、ホックステットに勝利を得て路を并インナに取れり。此處にはフランスの同盟者たるバヴリア選舉侯有りて、軍を出すことを躊躇せり(千七百三年)。而かも英將マアルポオは此の時已にネザアランドに上陸し、ポルトガルのチャアルス大公とザヴォイ公フランスに裏切し、ロヴェンヌに於てカミザルド黨叛亂せり。一千七百四年所謂ブレンハイム戰役に於てタラルド及びマルザン、ホックステットに敗走するや、佛軍は全くゼルマンより驅逐せられぬ。千七百六年五月ラミリスに於けるキルロアの敗戦は遂にネザアランドを同盟軍に委し、同じく九月チュリンに於けるマルザンの敗戦はアウストリア勢にミラネア、ピイドモントを占領せられ、更に翌年半島の他端たるネエブルスをも獲取されぬ。千七百七年にはツウロンだに危きに迫りぬ。歐州諸國が殆んど滅亡近きにありと思惟せるフランスは千七百八年にエンドオムに十萬の大軍を授け、ネザアランドに向はしめたり。されど軍はアウデナルドに潰

走し、リイルはパウフラアスの頑強なる抵抗の後降服するに至りぬ。かくてフランスは空虚にして守備なく、オランダ軍は深くヴェルサイユに侵入せり。時を伺うしてスペインは已に亡滅の觀を呈せり。イギリス軍はジブラルタルを奇襲し、チャアルス大公はマドリットに侵入し、千七百七年アラマンザにてベルキックの大勝を博して以來、全半島の主を以て自ら任ずるに至れり。

更に此の不運に重ねるに災厄を以てしたるは實に千七百九年の嚴冬より生じたる極めて凄慘なる饑饉なり。さしも豪奢に時めきし王の近侍をだにヴェルサイユの宮門に物乞ひの身とならしめぬ。是に於てルイは講和を要請し、有ゆる讓歩の後辛うじて屈辱を極めたる協商の承諾を同盟軍より得たり。而して同盟軍は要求すらく、ルイ王自らスペインより彼が嗣孫を逐斥せんことを要すと。此の要求に對する彼の答は、苟も戦はざるべからずとせば、吾は吾が見と戦はんより寧ろ吾が敵と戦はん」と云ふにあり。彼は各自治市、僧正、各種の監督頭取等に宛て、簡明直截にして悲憤激越の大詔を煥發して、從來平和を克復せんが爲に勗めたる苦衷

を述べ、最後に聯盟軍の提案を叙じ、その不法斷じて屈し得べからざることを懇へたり。國民は聲に應じて憤起し、災厄飢饉あるに係はらず、各僅かに残しおける最後のものを割きて國庫に收めぬ。富者となく貧者となく各自所持せる者を獻納し、壯者は競ふて銃を握れり。是に於て、ギラルズは十萬の軍勢を得て陣營を張ることを得たり。畢竟こは國民の愛國心の結晶なり。されば兵士にして上衣を被らざるものあり、靴を穿たざるものあり、糧食足らざるときは各代りて斷食を行じぬ。かゝる勇敢壯烈の行爲こそ眞に勝利を價すべかりしなり。されど一千七百九年九月十一日のマルブラケイの戰遂に敗軍に歸し、大將ギラルズは重傷を負ひ、ユウゲネ、マアルポロウの軍戰場の主となりぬ。此の役佛軍の死者八千、同盟軍の死者二萬、ために敵軍は續いて何等の計畫を敢てすること能はざりき。かくて翌千七百十年エンドオムはギラギシオサの戰勝によりて、フィリップ五世をスペイン王位に確立することを得たり。

同盟軍の被保護者たるチャアルス大公は千七百十一年その兄弟の薨去により

直ちにゼルマン皇帝となり、アウストリア王となりぬ。是に於て一フランス王子のスペインに君臨するを阻まんとして苦闘せる英和兩國は、今やまた一王子を輔けてマドリッド、ネエブルス、ミラン、ブラッセル、ボンナ及びゼルマン帝國を統治せしめんが爲めに再び戰鬪を繼續せざるべからざるに至れり。かくて英國が軍資金として同盟軍に支給せし公債は實に英貨六千萬磅の多額に達しぬ。爰に従來の史家が重要視せる宮中の隱謀事件は俄然平和克復の急下を催起せり、蓋し平和は當時既に自由國の主權者とも謂つべき輿論之れを嚮望し、女王亦之れを切願せり。時にアアン女后の寵臣マアルポロウ公夫人は、嘗て己が薦めて宮中に奉仕せしめたる親族の一女アビゲエル・マシヤムのため、その地位を奪はれたり。畢竟するにマシヤムは阿諂追従に巧みにして常に女王の意を迎へ、公爵夫人はその振舞粗漏にしてかねて驕慢の氣高かりしが故なり。事は倨傲なる夫人が落したる手袋を拾はざりしこと、及び故意にマシヤムの衣裝を汚したる二三滴の水染より爆破し、マアルポロウ公夫人は出廷を禁止せらるゝの命に接しぬ。ダアトマウス卿判決を宣告するや、夫人は其官章として着けたる黄金の鍵鑰を床上に放擲し、用あると

きは使用せよとの言を彼に残して去りぬ。己れまづ侮辱を蒙りたる夫人は次てその親戚友人をも伴侶に誘ひ、遂には公爵をも不名譽の中に引き入るゝに至れり。玉黨は軍資金中五萬磅を私消し、御用商より八萬磅の賄賂を收めたりとてマアルポロウ公を弾劾せり、彼は是一般の常套にして敢て我獨り咎めらるべきものにあらずと辯護せしかど事件は真相よりも甚だ誇大に吹聴せられたり。遮莫民黨内閣遂に玉黨内閣の代る所となり、マアルポロウ公は本國に召喚せられたり。かくて直ちにフランスと商議を開催せり、是に於てか知る、イギリスの眞意一に平和を愛好するがためなることを。一千七百十一年十月八日兩國の間に、平和條約の批准交換せられたり。

此事件は大に同盟軍を動かし、ウトレヒトの會議を見るに至れり、されどセルマシ帝は尙和を好まず、ケスノワを攻略したり、ユゼイン皇子は十萬の兵を以てランドレンイズを攻圍し、彼がパリに到る通路と稱したる戦線は甚だ延長せられたり。時に佛將ネラルズは此の虚に乗じてデナンに(一千七百十一年七月)大勝を奏し、敵の兵器彈藥倉庫あるマルシエレズを占領し、次てツツエー、ブウシヤン及びケスノワ

に進み、遂にユゼインをしてフランスより退却するの止むなきに至らしめたり。

海上に於て佛國の經驗したる處は只災厄あるのみ。且つ全歐を敵とするには専ら其の全力を陸上に竭さざるべからざるを以て、海軍は全く放棄して顧みられず、是に於てか英國は難なく、海上に覇を稱ふことを得たり。さればフランスの植民地は今や全く何等の保護なく、荒廢に歸するもあり、又討服せらるゝもありたり。されば當時佛人より成る海賊中には二三の海軍將官中武名を傳へられたるものもありたり。即ち最後の戦役にイギリスの商業界に一大恐慌を起さしめたるジャンバルの如き、之れを輔けて共に危険界を馳驅したるフォルバンの如き、其の他セントドミンゴの知事ボルニイス、デユカス、米のカアサゼナを占領して莫大の鹵獲物を齎らしめたるポアンチス、單隻を以て敵艦十五隻に包圍せられながら十二時間に亘る激闘を敢てし、英艦一隻を撃沈し、二隻を破壊し、かくて逃遁することを得たる猛將カッサルト、乃至十八歳にして十四門の砲艦の艦長となり、其の後年々大膽なる航海を試み、その都度莫大なる鹵獲物を輸したるセントマロウの一船主の子デユグー、ツルウアンの如き、尤も有名なるものなり。就中デユグ

！ッルウアンの本國海軍に召集せられたるときは、大戦の期已に終り、一千七百六十年艦長に任命せられたるも、その辣腕を用ゐるの處なく、只僅かに輸送船の拿捕、敵岸の強壓乃至單獨の小戦に止まり、十年前ジャンパアルの成したる作戦を繼承したるのみ。彼が武勳中尤も光輝を放ちたるをリオジネイロの掠略とし、敵に蒙らしめたる損害實に二千五百萬法以上を超へたりと、(一千七百一十一年)。要するに是の如き勇敢なる海將の功業も遂に大戦の運命を左右すること能はざりき。

却説デナンの大勝は偶、平和締結を急がしめたり。イギリス、ポルトガル、ザヴォイ公國、プロシア、オランダの諸國皆一千六百十三年五月四日のウトヒット條約に調印せり。是によりてフランスは一千六百八十八年の革命によりて確立されたる英王系統を承認し、同時にニエウフアウンドランド島、ハドソン灣、アカヂアを割讓し、且つ己はジャンパアルの故土ダシキルクの堡砦を撤去することを確保し、スペインはジブラルタル及びミノルカの所有權を更に讓與したり。加ふるに佛西兩王室は決して合體せざるべきを宣誓し、ルイ十四世は臣下にして宗教上のために投獄せられたる者を釋放するに同意しぬ。オランダは佛國に對する邊砦として西領

ネザアランドの要塞に守備隊を常置するの權利を獲、ザヴォイ公國はシリイ王となりて其の地を收め、プロシア王は佛國の承認を得て王號を稱し、同時にゲルデルンを得たり。只獨りボルマン皇帝のみ戰爭を繼續せり、されどギルラルスはランドウ及びフライベルヒを略し、同時にチャアルス六世は千七百十四年ラスグット條約に調印し、之れによりてウトレヒト條約に保留したるもの、及びネザアランド、ネエブルズ、サルデニア、ミネーズ、タスカニイを得たり、フランスのために不幸なる同盟者パヴリア選舉公は再び其の領土に安立せり。

此の戦役によりて就中大利を占めたるものは、アウストリア及びイギリスなり。前者はイタリイ及びネザアランドに曠大なる領土を得、後者は、海上の覇者となれり。加之一はイタリイに比して猶重要なるハンガリイを恢復し、他はマホン港を得てツウロンを壓し、ジブラルタルを得てスペインを威嚇し、かねて地中海の關門を扼せり。されどスペイン人はネザアランドを去るに蒞み、フランスとの戦に對して何等懇ふる處なく、二世紀に亘れる敵と永久の同盟を結ぶに至れり。ルイ十四世はラスグット條約の後僅々數年にして世を去れり、治世の晩年は初年の隆盛

と照繳していとも慘憺なりき、實に國家の不幸に加ふるに家庭の痛ましき悲愁あり、千七百十一年四月十四日には其唯一の皇嗣を失ひ、千七百十二年二月十八日には嫡孫バルガンデイ公爵を失ひ、同二月十二日にはバルガンデイ公夫人を喪ひ、同五月五日にはその長子ブリタニイ公爵を、千七百十四年には皇嗣の男ベリイ公爵を失へり。さしも家門の繁榮を誇りたるボルボン家も今やルイと共に残れる者は僅にその孫スペイン王フィリップ五世及び當時僅に五歳の曾孫、後のルイ十五世アンスウ公爵あるのみなりき。斯くも霎時打續きたる不祥は遂に王をして公義に背戻せる方途を歩ましむるに到れり。即ち彼が男にして已にモンテスパン侯夫人の養嗣となれるメロン公、及びツウルウズ伯を皇統の絶ゆるを名としてその嗣に上せり。かくて彼は攝政會議に彼れ等を列せしめ議長には彼の甥なるオルレアン公を擧ぐべく、並にメイン公を以て幼君の後見監督者たるべきことを遺言せり。

一千七百十五年八月中浣、王、メリイ遊行より歸るや、偶、危篤の大患に襲はれ、脚水腫し、壞疽生じて腐爛し、痛苦いふべからず。時の英國大使ステア卿は王の臨終九

月を超へざるべきとを賭せり。コオリイ行在中絶て一人の顧みる者なかりしオルレアン公は此時に際し、全宮廷の阿諛の中心となりぬ。王の世を去る數日前一人の庸醫あり、興奮劑を薦め、ために頓に氣力を恢復し、王食を取れり、醫また必らず回癒すべきを保す。是に於てや一時オルレアン公の周圍に蟄集せる宮臣は又遽かに散逸せり、かく人心の浮薄を觀じたる公爵は慨然として歎ずらく、王食を再びせは予は一人の侍臣をも有せざるに至るべしと。されど王の病篤くして再び起つ可からず、ルイ王、マンテノン夫人に告て曰く、朕はかねて死は更に甚だ難きことなりと思惟せりと、又家人に告て曰く、爾曹は何か故に涕泣するや、朕は恒久に不死なりとは思はざるかと、從容として諸般の後事を命じ、また葬儀の事をすら遺命せり。かくて生涯中に於ける二三の非行を懺悔し、儲君に戒むるに王者たる者は自己が戦争のため、又は豪奢のために行ひたる所爲に做ふべからざるを以てせり。實に彼が遺したるフランスは極處まで其の國力を消耗し竭し、國家は財源の索ぬべきものなく、只だ破産の外道なかりしなり。ポウジャン繼承戦争前に於けるフランスの國狀を叙して曰く、

「人民の約十分の一は乞丐と成り下り、残り九分の中五分の者はその境遇概ね前者と大差なく、到底之に恵むこと能はず、他の三分又窮迫し生計甚だ困難なり、最後の一分とて十萬口を超えず、この中にも潤澤と認むべきものは僅かに一萬口を出でず」と。

戦争前既に然り、凄惨なる戦役を経たる一千七百十七年に於ける國勢また想像せられざらんや、げに百に對する四百の割合を以て借金し、新税を起し、二年間の歳入を前借して支途に當て、今日の約三倍の價格ある貨幣を以て二十四億法の公債を募らざるべからざりし當時の窘迫察するに難からざるなり。

フランス及びフランセコントの二州並にストラスブルヒ、ランドウ、ダンキルク數市を獲得したることは到底是の如き深酷の不幸を賠償するの價值あるものにあらず。

一千六百六十一年に於ける全歐の大勢を追想する毎に、全局より見てルイ十四世は時の事情が佛國に捧げたるあらゆる利益を收獲せざりしといふ事を是認せずんばならず。遮莫、兒孫は父祖の困難を忘れ易し、次て來れる時代は唯過去廿年

間に贏ち得し幾多の戦勝、全歐を敵として敢て物ともせず之れが覇者たりし當時を談るを以て満足し、世界雙びなきヴェルサイユ宮の華麗、十七世紀をルイ十四世の御宇と呼ばしめたる美術文學の豊饒に満足して又他を思はしめざるなり。

第七章 十七世紀の美術、文學、科學

フランスの文學、美術、十六世紀は宗教改革を完遂せり、十八世紀は將に政治的革命を試みんとしつゝあり、是の如く兩箇の革新的時代の間、介在せる十七世紀は又之れと齊合する知的勢力を其の文學に有したり、實にこの思考力に適應する恰好の表情術を有したり、是あるが爲に十七世紀は佛國の何れの文學的時代よりも特にその芳名を萬世に傳ふるを得たり。蓋し事端滋く流血淋漓たる時代、熱烈火と炎ゆる紛争の時勢に生れたるものは、崔嵬たる峻峰、暗澹たる碧潭に瀝むが如き雄渾壯大の美は觀ぜんも、而かも後世の永懷飽くを知らざる平靜醇淨の英は以て觀ずべからず。

ルイ十四世はいまだ文學を以て一大勢力なりとは觀ずるに到らず、文學また未

だ其處に臻らざりき。されど彼は少くとも文學を裝飾として缺くべからざるもの、王者の豪華に必需なる贅澤物なりとは思惟したるなり。されば彼は文人詞客を寵して、之れが修養大成を奨勵せり、かゝる間隠然文學の統治機關とも見るべきもの、彼が廟堂の一隅に具はれり、而してその主宰はコルベイルその人なりき。彼は知力知識の修養場ともいふべき、アカデミイを建設して之れを制裁する法規を制定し、以て一定の調子を與へ、猶云ひ得べくんばその尺度をも定めんと企畫したる事已に叙したる處なり。蓋し爰に吾人の忘るべからざる一事あり。即ち王はその感化を文學に及ぼさんと欲するには、ルイ十四世の御宇已に老たることにて、王の未だ政治を掌握せざりし前、已にフランスは十六世紀が遺したる文學的光榮の半途にありたり。コルネイユ、デカアト、バスカル等已に不朽の名什を出し、マダムド、サギーネ、ラロッシュ、フーコー、モリエール、ラフォレティン、ボシエー等の尙方圓熟の期に達せり。特に當代の二大畫家ルシェール、ブウサンの中一人は既に逝去し、他は將に死に頻せり、諷刺家の大名ボワロウ恰も初篇を草し終りたる時なり。是の如き前代の遺留者を認めて、而して後十八世紀の大家をしてその先驅者を判ぜしめよ。

雄辯術、詩歌、文學、倫理乃至他の遊戯文字に關しては、フランス國民は實に全歐の立法官ともいふべく、當時の眞の雄辯術未だ何處にも知れるものなく、宗教は只諸謔的に講壇に演ぜられ、訴訟の法廷に辨ぜらるゝや唯嘲笑を價すべきものありしのみ。説教師は常にヴァジル、オピッドを引用するを事とし、法律家は聖アウガスチン、聖ゼロムを祖述するを能事とせり。未だ一人の天才の佛語に生氣ある脈管、調子乃至威嚴を與ふるものあらざりき、只僅にマルエルブ數韻律有りて幸ふして佛語を以てしてよく壯大と生氣とを示し得るを感知せしめたるのみ、而かも之れ唯前後一人のみ。ラテン語を以て作り、世の稱賛を博したる天才、例へばツウの大守ロビタルの大法官の如きも自國語を以てものしたるものは全く別人の手に成れるが如き觀を呈せり。是の如く文學を懸絶する佛語もかのジョンギル、アミオー、マロウ、モンテリヌ、レンニエ、諷刺家メニッピ等の功績を奏せしめたる一種眞率直截の點に於て漸く世の推獎を得たり。マコンの僧正リンゼンドのジョンこそはじめ佛語を以て壯大なる演説を試みたる最始の雄辯家なるなれ。次で一千六百三

十七年に公演したるギクトル・アマドーの追弔演説は眞に雄辯美辭の巧妙なる迸出といふべきなり。されば後年雄辯家の泰斗フレッシェーがチュウレヌ子を哀弔せる有名なる演説に彼が起語を借りてその冒頭を飾りしによつて見るもいかに美妙なりしやを察するに足る。

その後幾何もなくして散文に格調諧和の妙を附與したるものは實にバルザックなり（一六五四年）。蓋し彼が著作たる演説を強大したるものゝ如しと云ふ、誠に眞なり。されど又修辭の力よく人を感動せしむるの功あることを示したる又彼の力なり、何となれば彼が世人の賞歎を贏ち得たる畢竟當時いまだ知られざる諧和せる言語の選擇に關する修辭上の細目を發見したるが故なり。尙況んや往々格を破りて之を使用したる處すら世の稱賛を博したり。

國民的趣味を構成するに多大の貢獻を齎らしたる著作中特記すべきものはロッシブーユ公（一八〇三年）の編述にかゝる佛國格言集なりとす。此の書に含蓄せる思想は愛己は萬物の本原なりてふ極めて簡單のものなりと雖も此の思想の現はるゝ處よくあらゆる側面より描寫され指摘され殆んど一として網羅されざ

るものなし。一部の書を飭るの材料として此書ほど豊富なるものはあらず、されば當時の人は此の小集を熱心に繙讀し、遂に人をして此の思想に慣れ、よく明快細緻なる形式を以て之れを裝ふに到れり。

一大天才の散文にてもものしたるものは一千六百五十七年に發刊したる方言文學集を以て嚆矢とす。有ゆる種類の美文美辭皆是書に包まれざるものなし。且同書には百年を経過して語形の變化を蒙るべき文字一字だもなく、却て日常通用の言語を同書中の文字に改めたるもの甚だ多し。げに佛蘭西國語を一定したる時期は此書によりて標識せられざるべからず。有名なるブッシイの男ルツソンの僧正嘗て曰く、予モ一の僧正に、閣下若し從來の著述無かりしとせばいかなる書の著述家たらんことを欲し玉ふやと問ひしに、僧正ブッシイの答に「方言文學集の著者たらん」と以てその眞價を察すべし。

常に巧みなる倫理を講壇に演述したる始祖中一千六百六十八年頃有名なるは教父ブウルダロー（一七〇四年）となす、氏は實に斯壇の新星なりき。彼の後を襲ふて出てたる教壇の大才少からず、就中クレルモントの僧正教父コッシュン最も傑出

し、當代の時様を喝破して最も剴切峻銳なりき。

プウルダロウは當時モウの僧正たりしブッシエーに先んぜられたり。ブッシエーが千六百六十一年漸く弱冠にして今帝太后の御前に講筵を開き、雷名を轟かしたる時は彼はいまだ無名の人なりき。ブッシエーの説教は常に壯嚴にして感動せしむべき態度之れに伴ひ、宮廷にて初めて講じたる法演は特に一大成功を得たるものなりき。王之れを聽て大に感ずる處あり、直ちにその父に教を下してかゝる秀才を産める事を嘉尚し給へりと傳ふ。されど一度プウルダロー世に出づるや、ブッシエーは最早教壇の主領とは思惟せられずなりぬ。當時既に彼は研究方面を更へ、詩歌に類する想像と壯嚴とを要する雄辯術即ち追弔演説の研究に専心なりき。一千六百六十七年に公演したる故太后を弔ふ演説は之が爲めにコンドムの管區を授領されたりと雖も、いまだその眞價に酬ゆるには足らざりき。一千六百六十九年チャアルヌ一世の未亡人時の英國女皇に奉りたる頌徳表は彼一代の名作なり。花齡に折られ郎人の腕に逝けるオルレアン公妃の薨去を傷める弔辭は亦最大稀有の成功を得たり、之れを傾聽せる全宮廷中涕淚慟哭せざりしものなかりし

といふ。げに下の辭に讀み到るや聽衆索然として涕下り、歔歔嗚咽の音は辯士の音吐を妨げ、爲めに一時中止せざるを得ざりしと傳ふ。「嗚呼禍の夜！悲の夜！世をも顛さんずる悲報は紫電一閃耳を劈きて至りぬ。王妃は今や將に臨終に際し玉へり。王妃は今正に永く眠り玉へり」。

此の種の雄辯術に成功したるものは獨りフランスあるのみ。後また彼を俟て初めて成功すべき一種の雄辯術を創製せり。彼は雄辯術とは一見殆んど何等の關係を有せざる歴史にだに此術を應用せり。その『萬國史論』は到底他の模範として學ぶこと能はざるもの、又模倣すること能はざるものなり。世は彼が東西ローマ帝國の習俗、政治、その興亡隆頽を描ける健腕に驚き、その國民を描きて之れが批判を下したる眞理の透徹に驚けり。

有らゆる著作中同世紀に不朽の名譽を寄與したる所以のものは皆一様に老人の夢にだに知らざりし文體の美を有したるが故なり。フェネロンの著『テレマック』はその隨一なり。彼は(一七五五—一七六五)ブッシエーの門弟として又友とし良かりしも、後競争者となり、遂にはその仇敵となれり。その著は一種斬新のものにして、小説と

詩とを混交して作したる無韻の散文ともいふべく、謂ふに彼は嘗てモウの僧正ブシエーが歴史を筆したる作法を小説に應用せんと欲したるものゝ如し、即ち小説に嚴肅なる威嚴と不可思議なる妙味とを附し、特に是の如き小説を以て勸善懲惡の資と爲さんと欲したるものゝ如し。もと同書は當時已に師傳として教養の任に當りたるバルガンディ公が教訓の材にあてんとて作したるものなり。その文體は全く彼一箇の獨創にかゝるものにして、加ふるに故人の有ゆる知識を蘊蓄し、天稟の靈活なる想像力を以て經緯し、その辭藻豊富にして恰かも流るゝが如きものあり、不滅の名付たる又所以あるなり。されば同書中隱然ルイ十四世の政治を批難したるものありと思惟せられ、ためにフェネロンは宮廷より排斥せられ、再び宮中の人とならずなりぬ。

ラプルーイエール(一六六四—一六九四)の著、人物評もまた此等大傑著中の一に算へらるべし。この書また『テレマック』と同じく先人の未だ知らざる空前の新著なり。その文體の簡潔遒勁なる詞藻の婉轉畫樣なる文字の清新にして、而かも破格ならざる處大に世を動かせり、特に巧妙なる比喻に豐むこと又此の書成功の一因なりき。

以上の文人以外、日常の行爲または聞睹したる事實を叙述する一種の記者あり。フランス國民性の一方に片寄る偏寄性、且つ彼等が自己を娛ましめ當時の人を娛ましめ、乃至後世子孫を娛ましめんと欲したる、はた後進を誘掖する意見を叙説したる事に對してフランス國民は大に之れを徳とせざるべからず。何となればフランスは何れの國よりも最も多く記録文學に富むの國なればなり。かゝる珍奇なる歴史文學の一派の佛國に起れるは、歳時甚だしくエルアミルドアン及びズワンプルに生まれり。十七世紀は特に此の種の文學に富めり、就中其の記者は大抵聰慧なる知力と銳利なる洞觀力とを有して、當時の秘密事物の原因を後世に啓示せり。リシエリウのものしたる記録は當時の一大歴史の寶庫ともいふべし。アウストリアのアアン女王の寵臣たるモットギル王妃(一八六二—一八六九)のそれは吾人をして恰かも彼女と親しく相語ふの想あらしむ。常に冒險なる生活を試み、批難を免るゝ能はざる行爲を敢てしたるシワジイの僧院長(一七二四—一七四四)は『ルイ十四世史を補ふ記録』をものせり。ラッスの大僧正ポールド・ゴンディ(一七六一—一七九四)は後世佛語を以て認めたる紀念物中の一と目せらるゝ名著を残しぬ、書は假令その著者に對し

て尊敬の念を有せざる人と雖も尙常に縊きて感興を覺えざるものなし。ゴオル平ル(一七〇三)は『千六百四十二年より同七十八年に到る記録』を作せり。彼はギイエヌの賤奴税の收入長官たりしが、一時に巨萬の富を殖したる爲めフォオケーと同醜名を負はされたり。ディン市會議長ビイルルネーはフロンド黨の戦記をもつせり。アワストリアの女王アアンの攝政に關してはロッシュユウコ公の記録あり、同書の現はるゝや一時その攝政に就て誹謗の聲を高めたり。ルイ十四世の晩年及び十五世の初期に關しては同公とセント・サイモンのルウヴロアとの合編になる四十卷の記録あり。後者は甚だ有名なる文士なるには相違なかりしも、世に彼を天才タシタスと比較對照するものに到りてはその愚及ふべからず。

詩人にはレンニエー、コルエルブ共に前世紀に屬す、尤も前者は一千六百十三年に歿し、後者は一千六百廿八年に卒したりと雖も、ロトローは全然十七世紀の詩人なり(一五〇九)されどその著作中“Wenceslas”の悲劇を除きては殆んど誦讀せらるゝものなし。コルネイユに到りて初めて此詩界の一大傑作輩出し、此等の雄篇は相前後してフランス劇場に蟬りぬ。げに佛國劇壇をしてギリシアのそれと同

地位に登さしめたるものは全く彼の力なり。

されどピエール・コルネイユは未だ今日の如く多く賞歎せられざりき。蓋し彼の悲劇をはじめて世に出したる頃には、彼と型と同じうする數多の羣少作家彼を圍繞したるが故なり。此等羣少の類型家が甚だ持囃されたる事實は、自然彼が文學的昇進の道途を阻害することゝなりたり。加之、當時文人の保護者否善良なる趣味の保護者にはあらず、只一大勢力を振ひたるカアヂナル・リシェリウのため此等羣雀の愛顧せられたる事實は一層彼をして失意の地位に立たしめたり。是に於て彼は斷然時代と戦ひ、競争者と争ひ、特にその作“*The Cid*”を凡作と做し、“*Polyeucte*”を蔑如したる僧正と拮抗せんと決意し、かく發憤奮闘の結果彼は始めて獨創の作を創造せり。さはれ、ルイ十四世、コルベイル、ソフオグルス、ユウソピデス等は皆各寄りて斯界の明星ラシイヌ(一六三九)を作り出せり。

彼二十歳の時當王の結婚を慶賀せんためにものしたる頌歌ははしなくも彼の夢にだに思ひ設けざりし賜物を得、且つ彼が後生涯を規定するものとなりぬ。以後彼の名聲は日増に擴がり、之れに反してコルネイユのそれは漸々に聲譽を失墜

せり。蓋しかゝる所以のものは、ラシイヌはかの『アレキサンダア』に次て作せる全作篇皆常に典雅端正、眞摯にして、その語る處皆人の胸底に觸る、然るにコルネイユは此の資質を缺けること甚だ屢なりければなり。人情の幽趣を啓きたる點に於て希臘の大家並にコルネイユ等は到底ラシイヌの比敵にあらず、亦實に聲調の妙措辭の美彼によりてその極處に到れり。

されど當時夥多の同類者は彼が秀名を貶さんとして各その羽毛を飾れり。當代に於ける書翰體の急先鋒として特に瑣事を描くに巧妙を得たるセキンイェ夫人(六九二六)の如き恒にラシイヌの到底大成すべからざるを公言し且つ嘗て夫人が珈琲に付て下したる判斷を以て彼を判じたり。その言に曰く、珈琲は此の後幾何もなくして飽るるに到るべしと。さはれ圓熟に到達して眞の令聞を得んには、時こそ最も必要なれ。

當世紀の稀有なる運命はコルネイユ及びラシイヌの同業者としてモリエール(一七六三)を喚起せり。世にモリエールの顯はれたるときはフランスの劇壇全く好喜劇を缺けりといへるは蓋し事實にあらず。當時已にコルネイユは“Tir”を

出せり。脚色の模型と賞賛せられたるキイノオの妖嬌の母を世人の愛翫せる時は未だモリエールには傑作として世に出したるもの僅に二篇に過ぎざりき。

モリエールの喜劇は實に一千六百六十四年の日附を以て創まる。こは實に後年「大人物」と號さるゝ當時の佛國人民を描寫せる最初の喜劇なりとす。ルイ十四世の朝に仕へたる貴族大官は概ねその主君の尊大なる風貌、華美壯麗なる扮装に擬せんことを願ひ、上の好む所下これより甚しく、倨傲佻街を直寫し、中には殆んど極端に之れを模し、全く嗤笑の極に達したるものもありき。かゝる弊風は永くその跡を絶たず、モリエールの之れを批難攻撃したる只に一再のみにあらざりき。げに世人を誡めてかゝる佻矯、虛街、乃至婦人の街學、妖媚、醫師の華美なるラテン風の衣装を誹譏し、聊この弊風を矯むるを得たるは一にモリエールの力與て大なり。彼は實に當社會の惡弊を矯直して禮に合せしめたる立法官なりともいふべし。遮莫茲に彼に付て語りたる處は只彼が當世紀に致したる如上の一功績のみ他の功勳に關しては一般によく熟知せらるるところ更に贅言を要せざるなり。

如上の大才を輩出したる時期、即ちコルネイユ、ラシイヌの描きたる主人公、モリ

エイルの寫したる人物、乃至ルウリイの唱へたる格調の美は皆全く當時の國民の未だ嘗て味はざる斬新の趣味にして、特に後世の注意を價する時代なりとす。但し技巧の點に於ては、ボッシュエイ、プウルダロウ等の聲調最も當時の趣味に適し、ルイ十四世を始めとし、多趣味の點に於て有名なりし王妃、コンド公、チュレンヌ子、コルベイル乃至その他當時有名なる人の注意を惹起したり。されどフランス文學の思想一度談理の道に傾向するや、また再び如是純文學の盛觀を視ること能はざるに到りぬ。

デブレイ（一七六一—一七六三）亦此の間に出て、儕々たる大文士の一斑に加はれり。但し彼がその大名を博したるは、彼が初年の作たる諷刺詩によりてに、蓋し後世の視線は、嘗その當座にのみ興會ありし、パリの混惑又はカッセイヌ、コタン等の名目の上に恒に停止せざればなり。眞に彼が名譽ある地位を文學史上に占め得たるは、かの美はしき書翰就中かの詩的技術によりて、後代に多少教訓を垂れたるが爲めなり。將に後者は、コルネイユをして、大に覺る處あらしめたるものなり。ランフォンテーヌ（一六九二—一七六五）は、文致必らずしも醇淨清新ならず、又措辭間々正格を缺け

りと雖もその事を叙する率直、毫も衒氣なく、その間無限の幽趣あり、實に天真流露の趣こそ、彼が獨歩の天地にして、他の大才と共に伍せしむるもの一に是あるがためなり。

かく一時に多數の天才續出以來之れに亞ぐの大才漸く稀となり、ルイ十四世の歿後に至りては、流石自然とその材源一時涸渇したりと見え、暫時休止の態を呈せり。

哲學はデカアトによりて從來の局面を根本的に打破せられ、爰に全く一新生面を開けり。されど彼が破壊の功はいまだ建設の功と伴はざりき。是に於て乎、彼が哲學體系は、かゝる場合に於ける必然の結果として總ての哲學體系に於けると同じく直に倒落せり。而かも思索の方法は依然として存續せり、特に誤謬を刈除し、眞理を發掘するには尤も銳利有力なる武器として繼承せられたり。デカアトは理性に自明なるもののみをその物心兩學に採用せり、而して此の自明本據を良心の證明に据へ、之れを以て不可抗の證權とせり。かくて一千六百三十七年の著「メソッド」此書の筆致は、明淨透徹、毫も暗昧の跡なく、實に十七世紀に於ける佛國散文

の特色の一に算せられたるもの並に同四十一年の著「瞑想録」とに於て、神の存立、靈魂の靈性及びその不滅乃至人間の自由、義務等を論證し得るは一に理性の助によることを論述せり。彼の主張は十七世紀の宗教家によりて多く採用せられ、教父マレブランシユは名著「真理の探究」に之れを唱導し、ブッシーは「神並に自己の認識に關して」に之れを布演し、フエロンは「神の存立論」に之れを唱へたり。是に反して此の主張に頑強なる反對説を試みたるはガスサンデイとなす、彼はデカアトが觀念を本具のものなりと説けるに對してその起原を感覺に起すものなることを唱導せり。

デカアトに比敵する知力上の泰斗として別にパスカル(一六六二—一六六三)あり。彼は一千六百五十六年の著「Provincial Lettre」に於てゼスキト教の緩慢なる道義を攻撃し、その著思想漫録に於てキリスト教の眞理を集成せんと試みたり。兩者はまた文學上より見て珍とすべきものにてこれに以て優に大文士たることを得たり。爰に彼とデカアトとが哲學上に致したる功績によりて兩者を判ぜんに、パスカルは幾多の發見有りしとはいへ、獨創の才に於てデカアトの比仲にあらず、その燃犀銳

利なる批判の才に於ては獨り天才の名を恣にす。

パスカルの周圍には彼が教友雲の如く集れり、彼等は皆ポオトロオヤルの敬虔なる隱者にして、その知見はよし多少狹隘なりとの批難を免れざれども亦甚だ峻銳なる批判力を有したる人々なりき。彼等は爰に相結合してロオマ舊教の中心地ガリカル教會の勢力地に於て尤も反撥的一宗派を開基せり、この宗派はルイ十四世の迫害に對抗して平板なる十七世紀に神學的爭議の波瀾を再興せり。ジエンセン宗中の名士にはゼスキト教徒のために三年間パスチイルの獄に繋かれ、その間聖書の翻譯をしたるル・メトルド・サシイ(一六四一—一六四二)あり、ゼスキト教徒、新教徒並にコレブランシユ等を敵手として恒に神學上の論争に生涯を竭し、大アルノオと稱へられたるオントワ・アルノオ(一六四一—一六四二)あり、その著「道德論」を以て著明なるニコール(一六六二—一六六三)あり、乃至教育上の著述を以て有名なるランスロウ等あり。此の思潮に遠く離れてベール、及びラ・モッスル・エイエはラベレー及びモンテイヌの懷疑的註解を施せり、之れは後代ヴォルテイルの襲ふ處となれり。

古代の遺物を發掘し、混沌未分たる國民の起原に新光明を興へんと努めたる佛

國の碩儒に對して吾人は大に感謝せざるべからず、素より彼等がその國語に及ぼしたる感化は甚だ尠く、否殆んど絶無と云ふも可なるべし、何となれば普通筆を取るの文士にあらず、よし執るとありても概ねラテン語を以て記述したればなり。されど陰然思想の上に蒙らしたる感化は又實に僅少なるものにあらず、蓋し過去を明かに理解することは難て現在に光明を與ふることゝなればなり。遂に彼等が努力の結果は眞理の一線を索出するに到れり、歴史の一科たる考古學即是なり、此は現に吾人を指導しつゝあり。當時斯學の泰斗と目すべきものにはカツウボン、スカリジエイル、ソウメイズ、ツカンエー、バルウツ、及び聖マアルのベネチクト僧徒等なり。

物一として人知の發達に寄與せざるものなし。大文豪の輩出したる時は又大美術家のこれに伴ふものなり。有ゆる名流傑士を感染し、秀拔なる一代の才人を奮起せしむる知的疫癘は十七世紀に於ては學者詩人等の集合より美術家を除外するほどいまだ激甚ならざりき。

・當時畫界の泰斗として、四大家ありたり、即ちブウサン、ル・スウアル、クロオド・ロー

ラン、ル・ブラン等是なり。巧妙なる彫刻家にブウゼイあり、建築家の巨擘としてマンサアル及びペエロウあり、樂界の名人としてウリイありき。

ブウサンは久しくロオマに淹留し、已に彼地に於て當代第一の畫家たるの令聞を博し、而して修身名譽を毀損することなかりき。彼の描ける色彩は餘りに陰沈に過ぎたりと雖も、その道德的雅致を具へたる點、劇曲的趣味ある點、構材の豊富にして詩的なる點、乃至彼自ら稱して「知慧の崇き樂」としたる理想の追求に毫も倦退せざりし諸點に於て、優に佛國派の巨擘たることを得たりき。更に之れに加ふるに、彼が生涯の端嚴なる威儀ありし點は記憶すべきなり、蓋しこは美術と全く絶縁するものにあざればなり。げに彼は財産名譽乃至世に推重する名流との親交等を斥けて毫も顧みず、只自己の理想を悄悦して美術に精進せり。恰も光輝赫耀たる所にダイオセネスを据えたるが如く、全く不用なりと認めたるものは世のいかに高貴なりとするものも之れを土芥視して一顧盼をだに與えざる處ギリシヤの古哲の再現したるものとも見るべし。ル・スウアル、ル・ブラン、ミンアアル等は皆彼の門弟と見做すことを得、何となれば、彼等は久しく彼の指導を受け彼の忠言を

受けなければなり。プウサンはノルマンディのレアンデリイズに生れ、一千六百六十五年七十二歳にして卒せり。ル・スウアルはパリに生れ、人に知られずして貧しく生活し、一千六百五十五年三十八歳にして逝けり。彼の大作として有名なるはカ・アスウシアン教の寺院に聖ブルウノオの傳をなしたる廿二體の肖像を描きたるものなり。彼の性情は極めて温厚篤實なりしを以て、繪畫もまた自からこれを顯はし、最も嚴肅なる題目を描くに際しても猶恒に温乎たり、總體の調子の優婉にして纖細なる處よく彼の性情を表はせり。彼と全く趣を異にしたるは敵手たるル・ブランとす。彼はル・スウアルに後るゝと二年即ち一千六百十九年にパリに生れぬ。彼が性情の甚だ華奢にして芝居が、りの處最もルイ十四世の意に適し、大に寵遇を受けて、繪畫御用掛長を命ぜられ、エルサイユ宮の大廊の裝飾を托せられ、彼十四年間これに従事せり。彼はコルベエルの死に至る迄佛國美術の全權を掌握して司宰者となりその間彼が意匠若くばその忠告を受けたるものにあらざれば何事も成すことを得ざりき、實に其の勢力の宏大なる殆んど當時の有ゆる製作物にして、彼れの手の入らざるものなしといふも過言にあらず。彼が繪畫には生氣

潑瀾の趣なく、總じて濃厚にして、人物は眞實に遠く、寧ろ誇張に失せり。要するに彼にはチチマンの華麗なる色彩なく、ル・スウアルの静寂温雅なく、またルウベンの雄渾なる氣魄、プウサンの深奥なる幽趣を缺けり。しかはあれど彼の畫家たることに於ては少しも疑ふ所なし、就中第二流中の主位に位すること何人も異論なかるべし。げにルウブル博物館を飾る「アレキサンダア奮戰」の圖は彼の筆になれるものなり、亦ロオマにフランス畫風を開きたるも彼の功なり。蓋し當時の青年畫家中パリにて年々施行せらるゝ競進會にて「ロオマ大褒賞」と稱せられたるものを得たる者は、官費を以てロオマに留學せしめ、眼前不朽の大作、イタリイの大天才に接して親しく繪畫を研究せしむるの規定を創設したるものは即ちル・ブランなり、ければなり。以上の四大家と併立してその椅子を設けざるべからざる二人あり、一は則ち肖像畫に妙技を有したるフリッブ・ド・シャム・ペイヌなり、肖像畫以外彼の一大傑作として賞賛を絶たざるは「聖ゼルベイ及び聖プロテイの幽靈」となり。他をミニヤアル(一六九一〇)とす。彼は一時ル・ブランの競争者たりしことあり、その作ヴァル・ド・グラアスの壁畫は最も有名なり、されど後世より見るときは當時の如く稱賛

すべきものなりとは思はれず。されど當時艶麗溫柔の趣味あるものを稱して「ミヤアル流」といへるを以ていかに彼が珍重せられたるかを推察するに足る。

クロード・ゼルリイは一千六百年ロウルレイヌに生れたるより一名をクロード・ロウルレイヌと稱せらる、一千六百十二年ロオマに客死す、彼は佛國唯一の風景畫家なり、否、恐くは歐洲第一と稱するも溢美にあらず。彼また光を描くの妙技を具へたり。ルッザル博物館中に藏する風景畫及び大洋畫はその陰影の美、着筆の豊富なる處猶今人の賞嘆を絶たず。

元氣の活潑旺盛なる點に於てミケラアンゼロに肖似したるピュージェーは一人にして畫家、建築家、彫刻家を兼ねたり。彼は一千六百廿二年マルセイユに生れ、一千六百九十四年に逝けり。彼はツウロンに在て船舶の艦部及び望臺裝飾に用ゆる木彫に久しく従事したり。傑作の多くはゼノアに集れり、特にルイ十四世のために製したる「Pausanias」及び「Nilos of Orotoma」の木像は最も精巧を盡したるものなり。就中後者の人像は恰かも活けるが如く、表情の充實せる點、意匠の正實なる點に於ては優に古代の大傑作と角逐するに足る、只憾むらくは體力をのみ表現せんと欲

する時にだに猶美術家の忘るべからざる形の崇高を缺けることを。是がために、ギリシア全國より十三回も勝利の桂冠を戴けるこの大力士も彼が縮像にてはこの數度の勝利をまづ記憶より取り去て表現せざるべからざる事となりぬ。要するに彼は大美術家は大理石を弄ぶものなりとの思想を餘りに明白に實現し過ぎたるなり。げに彼の言に曰く、大功業を以て養はれたる大才は製作せる時だに天上と翱翔しいかに宏大なる大理石と雖も彼が前には慄ひ戰くと。却説す、ピュージェーの性格は餘りに獨立不羈にして到底ザルサイユ宮中成功の人にあらず。彼の到るや歓迎せられたり、されどその「ミロ」の報酬として受けたる處は製作中に消費したる全額を償ふには足らざりき。彼には一人の門弟なし。コワアズボックス、兩クウスツ、ジイラルドン等は彼と系統を異にしたり。是等の諸士亦皆巧妙なる彫刻師なり、特に風致の絢爛柔和なる點に於て卓越せり、されど惜哉皆高雅なることを缺けり。コワアズボックスの妙技はラ・コンコルド宮の城門を飾れる「天馬」に見るべく、又「吹笛者」「花譜」に窺ふべし。ニコラス、クウスツツの名技は「セイヌ」「コールヌ」「牧羊者の獵師」乃至「ジュリアス、シイザー」によりて見るべく、ジーヨーム、クウスワア

の妙腕は「ヒッポメネスとアーランタ」及び「シャンゼリゼイの門口を飾れる「悍馬」に付て見るべし、ジイラルドンはヴェルサイユ宮中に住し、その作又此處に存す。ソルボンヌに在る僧正リシェリュウの靈廟は彼の作中絶佳と稱すべきものなり。カルロ・ナンツアル及びオードランの彫刻は全歐を通じて繪畫を所持し能はざる人々の小房を飾りぬ。

フランスワアコンサアルは風致の壯大にのみ重を措き、全く文藝復興期に於ける典雅柔婉の致を忘失せり、是がためその作總じて濃厚。彼はヴァルド・グラス流を創削し、聖セルコン・アンレイの附近にメエソンの離宮を建築せり。二重勾配屋根は彼の創意にかゝるものなり。こは往々屋根の絶頂の甚だ單調に失するを補ふに効ありと雖も、又その淡白の趣味を傷ふこと往々あり。彼の甥なるジュリイ・アルドワン・マンサールはヴェルサイユ宮、マリイ宮、大リアノン聖シャール、ヴァレドール殿、ゴクトール殿、乃至アンヴァアリの屋宇を建築せり。總じて彼の作風は形式的なり。是を以てルイ十四世が時日と資財とを惜しまずして彼が技倆の全力を盡さしめたるを以て、壯大の點に於ては殆ど完璧と稱するを得べし、されど典

雅高崇といふ點に於てはアレザリットの堂宇を除くの外見るべきものなし。クロード・ペエロー(一八六〇—一八〇八)は醫師物理學者にして又大建築家をも兼ねたり、一方にボワローの在るにも拘らずその令名を一世に轟かし、ルウヴル宮の東面に引きたる設けはベルニニのそれよりも優れりと稱せられ、其柱廊は彼の妙腕になれるものなり。ルノートル(一七六〇—一七〇三)は前裁師として天才の名あり、斯業の祖と稱せられたる人にして、庭園に前裁の技を用ゐて離宮別荘等の裝置に愈々精美を加ふるに至りしは全く彼が力によれり。陸地測量術の大家ラキンチニイはこの學術をして嘗に實用的ならしめたるのみならず、又これに興味を加へしめたり、此兩人はルイ十四世に重く用ゐられこの大世紀の赫々たる功名者の班に列するを得べし。フロレンス人なるルウリイは年十三にしてパリに來たり、佛國オペラ劇の開祖たるキイノーと共にありき。彼の音樂は特に堪能なりしといふ寺院の音樂だに優れたる獨特の妙味ありとも覺えず、されば當時の人々が彼に下したる判斷も區々にしてセキ・ニエ夫人の如きは、大法官セジイエーの葬儀よりの歸途彼を極賞して曰く「妾は天界にも是れにまされる妙音樂ありとしも思はず」と。

ルイ十四世の代に於ける主要なる紀念物を算ふれば、まづフランスワア・マンサールの創意になれる半圓屋頂のヴァル・ド・グラスとす、その内部はミニヤールの妙技になれる壁畫を以て美々しく裝飾せられ、遠く以太利の大壁畫と相呼應するに足るものと稱せらる。次で建築家ルイル・ヴオーの手になるコザラン校即ち當今の會議院、天文學者ピカアル(一六六六)の設計によりて構造せられたる測象臺、一千六百七十年ブロンデル並にその弟子アル・レットと共に着手したる聖デニス及び聖コルタン寺の門、一千六百七十四年リベラル・ブリュアンの建築になるアレヴァリッド、並にその寺院、こはジュイ・マンサールが建てたる尖塔の美麗なる、半圓屋頂に比しては少々狹隘なる觀あり。次にルウブル宮とチュイレイ宮との間にある「比武殿」こは一千六百六十二年此處にて壯觀なる一大試合を行ひしより此名あり、其他「凱旋殿」及び「ヴァレドーム殿」はニメーゲン條約の際大將ラン・フィエード(Marshal de la Feul-lads)並にパリ市よりルイ十四世に奉獻せる肖像を藏むるために造營されたるものなり。

當王の初期よりチュイレイ宮の造營は着手せられ、ルヴォオは一千六百六十四年

にオルローチの半圓頂屋の工事にかゝりてその西面を完成したり、但しこは雅ならずして稍くどきの觀あり。次年ルノオトルの新意匠によりて設計されたる庭園は王城と唯一街を距て、連絡し次でシャレシエリゼーに擴がり、一千六百七十年並木を植え、かくて舊市の壕の位地は北方の遊園地となれり。ルウブル宮には當時猶幾多の土木を起すの用あり、前王ルイ十三世の朝には時の造營師ルマルシエイがオルローチの半圓頂屋を構造して僅にその西面の下部を竣功したるのみ、こは八ヶの女像の大支柱を以て裝飾せられ、次で此工事はピイル・シスコイの妙腕によりて全く完成を告げたり。此大工事を竣成するに付きては、そのはじめ、時の宰相コルベイルは佛國及イタリイ中の大名匠を得んとて賞を懸けて之れを募集せり、此選にあたりたるは物理學者として名あるクロード・ペエローの考案なりき。遠く一千六百六十六年の頃、その東面の外廊のみ漸く聖ゼルマン・ロオセルロア寺に相對して立つことを得たり、こはルウブル宮の有名なる柱廊なり。之と同時に現今のルウ・ドリポリイと相隣りて南面の外廊成れり、此等の大造營ははじめは駭々としてその工事進捗せしが、漸次日を経るにまゝに遅緩となり、コルベイルの哀願

ありしにも拘らず遂に中止となりぬ當時王は又エルサイユ宮の造營に着手せられたり。

エルサイユはルイ十三世の朝には荒涼たる一寒村にして遊獵家の集ふ所なりしが、十四世は之を拓きて一大都となし、王宮を建てんとて一千六百六十一年これが工事にかゝり、一千六百七十年その監督をジュリマンサアルに命じ、以後此朝の終期に到るまで引續き此工事にかゝれり而して畫家の名流ルノートル、ルブラン、及びその門弟子特にジラルドンは専らこの豪華無雙の王宮を装美するにその妙技を振へり、げに此の宮殿の費用は二億五千法の巨額に達せりと云ふ併も此玉樓に出入するものは佛國民にあらず、唯一人王あるのみ

時にエルサイユ宮に缺けるものは水運の便なりしかば、王は莫大の資を投じてマアリーの建造したる機械を備へたり、こはリエージの工業家レンニキン、ソーレムの考案になれるものにして、一千六百七十五年に着手し同八十三年即ち前後八年の長歲月にして漸く竣功を告げたり。されどいまだ充分なることを得ざりしかば王は更にアアル河を開鑿し、幾多の溪谷を横斷してエルサイユに引かんと計

畫したり、實に此工事は吾人をしてパラオの榮華を想起せしむる類まれなる宏大なる工事にして、數年間一萬の兵士はこれに力役を課せられたり。されど不幸にも戰爭より得來たりたる時疫は當時尤も猖獗を極め、遂に中止するの餘義なきに畢れり。

王は又之と同時にエルサイユ宮に相隣りて大トリアノン並にマアリーの造營に着手し、前者は一千六百七十一年より同三年に至る間二回の改造を試み、後者は一千六百七十九年の建造にして聖シモンの記する處によればその費用またエルサイユに譲らずと云ふ、こはや、誇大なるべけれど、吾人の計算によれば四千萬法の費用は要したるなるべし、さはれ一箇の避暑邸としてはまた巨大なる出費にあらずや。猶聖ゼルマン、フォオンテーン、プロー、シヤムポール、聖クロ、乃至シオーの別莊など、この王の御世に改修造營せられ、特に名人ルノートルの妙技によりて一層の美觀を呈せり。

吾人は此章に於て港灣の改築、武庫、要塞等の建造、南部の運河開鑿等その他一般公共の大工事の起りたることを叙述せり、されば王の豪華の夢想を充たすに用ゐ

たる浪費中、國家の事業に費したるもの少からず、彼と是とを比較しなばその間敢て甚だしき差なかるべし。要するに蓋し此の如きは全國民の財産を擧げて、何等の討議もなさず監督も用ゐず、専ら王の任意に行ひたる政治には、必然免るべからざる結果なり。

諸外國に於ける文學美術

當時のイタリイは政治的に凋褪の態を呈したるを以て文學も亦同一の觀を示せり。その詩はタッソニイ(一六五五)の名什、セクシアラビタ、またマリニイ(一六五九)の傑作「マドニス」などによりて表はるゝが如く、纖弱を極めたり。抒情詩にはキデー(一七五〇)「フリカヂヤ」(一七〇七)及び、ネエブルスのアカデミア、デグリイ、オヂオシイの開基者たるマシゾー等ありと雖もいまだ稱せらるゝには至らざりき。

ポルトガルは前世紀にルシアッドの歌者、世界の一大天才カモエンス(一五七七)を有したりしも、その後微々として振はず、スペインはこの時かのアロカニア族と智力に抗爭したる功業を歌ひたる秀才エルシラ(一五〇〇)を失へり、されどなほ一千八百種の劇を作りたりと傳ふるロイブド、エーガ(一五三六)あり、一千五百種の

大作を成したる奇才、トレドの僧正カルデロン(一八七〇)及びドン・キホテの不朽の作者ミジュール・ド・サーヴァンテス(一五四七)を有したり。

對岸の英國は文華爛熳、百花研を競ふの盛時にして、一身にコルネイユとモリエールとを兼ねたる大天才シェイクスピアを出し、失樂園の大詩人ミルトン、チャアルス二世の朝の桂冠詩宗、英國古文學の文學ドライデン(一七〇三)あり。次で沙翁を除きて英國悲劇中の最優と目さるゝ「カートの作者、スペクター記者として命名あるアデソン(一七一九)あり。其詩篇の言に金玉を聯ねたる文辭を以て名あるポーブあり、ホオマーを英譯し、諷刺詩の上乗、ダンシアッドを作し、人間論を著せり、就中最後のものは名士ボリングブロークがその哲學を發見したりと傳ふるもの、但し彼は次世紀に屬するの人なり(一七四八)。

ゼルマンは時いまだ鐵器時代を出でず、只僅かに神秘家の靴師として知られたるヤコブ・ベイメ、及びマルチン・オーピッツを有したるのみ。後者は諸種の文體を以て著作を試みたり、而してこは懸てドイツの國語、文學に偉大の感化を與へたるものなり。

其他僅かに傳はれるものを擧ぐれば、イタリイにトレント議會の大史家として一名フラ・パオラと呼ばれたるピエトロ・サルビー(一六五三—一七一三)あり、ヘンリイ二世の崩後よりザルヴァンスの平和にまで叙述したる佛國內亂史の著者タギラ(一六三六—一七〇八)あり。英國には「謀反史」の著者チャアルス二世王の大法官たるクラレンドン伯(一六〇四—一六八二)の著に和蘭に關する最も珍奇なる記録あり、又サリスベリイの激烈なる八年の三國同盟を締結せしめたる外交家として有名なるサア・キリアム・テムブル(一六二八)の著に和蘭に關する最も珍奇なる記録あり、又サリスベリイの激烈なる牧師として有名なるバアネット(一七一四—一七四三)の著に英國革命史及當代史あり。スペインにては「西班牙史」の著者としてゼスキット・マリアナ(一六二四—一七〇七)あり、又「印度史」を著せるエルレラ(一六二四—一七〇七)「墨西哥征服史」の著者たるソウリイ(一六〇一—一六八六)等あり。

政治學には二大碩儒出でたり。その一はオランダの人フウゴ・グロチアス、一名をヴァン・デルフトと稱する人は是なり(一六二四—一七〇六)其の著「De Jure Pacis et Belli」は國際法上時代を劃せるの名著なり。他はスウェーデンの人、サシユエル・フエーフェンドル

フ(一六三三—一七〇四)にしてその著「De Jure Naturae et Gentium」は前書に劣らず有名なるものなり、これは倫理道德の原理をば社會的關係に就て論述せり。

純正哲學の方面にてはもと佛にデカルトなく、獨にライブニッツなかりせば英は正にその覇權を握るべかりしなり。即ちゼエムス一世の朝に大臣の椅子を占めたるフランシス・ベイコン(一六二〇—一六九二)は「新論理學」を著し、科學研究の方向を一變せしめたり。彼は此書によりて實驗觀察の方法を創設し、之によりて事實の發見を確實ならしめ、歸納法を創設して自然法の發見を可能ならしめたり。近世科學の現今に於けるが如く、かく多大の進歩を爲したるは一に此道を辿りて前進したるが故なり。同じく英人にして之に亞ぐの哲人はトオマス・ホッブス(一六三三—一六八〇)なり、彼はその著「レギアサン」に於て説明を試みて曰く、人類の自然の状態は互に相反する戰鬥状態なり、之を防がんが爲めには善良なる專制君主最も必要なりと。次に形而上學者カッドヴォース(一六二七—一七〇九)有名にして、彼は成形的媒介物ありとの説を設けて心身相關の理を解釋せんと試みぬ。此の説によりて大に相關説に横はる困難を移去せることを得たれど、いまだ全く之を解決するに至らざりき。次にニッ

トンの友にして形而上學者として有名なるクラアクあり、彼は久しき間書簡を往復してライプニッツと議論を闘はしたり、その著に有名なる「神の實在並にその屬性論、附自然的啓示的宗教の證明論」あり。

又遠く隔て、斯界の三大名士あり、即ち猶太人種なるアムステルダムのスピノザ（一七三三）はその一人にて汎神的哲學を唱導せり。次に英國の人、ロック（一六三二—一七〇四）はその著「悟性論」に於て觀念の起原は感覺と反省とに外ならざることを論述せり。最後はライプニッツに生れたるライプニッツ是なり。彼は觀念の起原を説明して、活動と知覺とを備へたる單一の本體即極微と做し、以て極微説を創説し、尙心身相關を説明するに豫定調和説を唱導せり。彼宿命を説明して恰かも普遍的筆蹟の投影の如き者なりと做せるをベエールは極力反對し、彼又その反駁論を反撃するがために「セオデシイ」なる書を著せり。

美術界にありては嘗て前世紀が騰さしめたる位置を保留すること能はざりき、尤も此世紀の美術家はその才に於て前世紀のそれに當れりと雖も、その數に於ては到底十六世紀の及ぶ所にあらず。而して此等多數の美術家は各、その派により

て優越の地位を争ひしも、第一流の地位は遂に佛國に落ちずしてオランダ及フレミッシュの二派に歸しぬ。この第一流を代表するものは即ちルウベンズ、ヴァンダイク、レムブランド、テンニールズ兄弟等なり、而してフレミッシュ派は從來踏み慣らされたる書途を逐ふて専ら大史畫、聖畫等を描けり。オランダは全く一新生面を開拓し、斬新なる浮世畫及び架畫の研究に専らその力を盡しぬ。當時此架畫浮世畫の流行したる事甚だ夥しく、之れがため流石に微小なる畫布もその大きさを加へたるかの觀を呈しき。そも此現象は何處よりか來れる、蓋し當時の一大勢力たるカルピン教は偶像破壊を以てその本旨としたれば聖畫を繪様に表現することを嚴禁し、地方に於ては新教の嚴肅主義が荒誕なる小説的なる繪畫を禁じたる事實の反動に基くものなり。彼等の態度の共和的にしてその生活の奢らざる萬事に素樸なる處、かの大なる宮殿に愛さるゝが如き華美妖艶なる繪畫を嫌忍せる誠にその理なり。

十七世紀は實にオランダの黄金時代なり、されど此時代が後世に傳へたる大作は僅に七點あるのみ、その内の五枚はアムステルダムの博物館に残り二枚は海牙

の博物館に藏せらる。蓋し此の如く大作の僅少なる所以は、只オランダの境遇の然らしめたるものなり。げに彼國の天空は暗澹として霧深く、恒に爐邊に一生を過さしむるの生活は彼等が想像力を縛して一步も自在なる天空に昇らしめざりき。如是事情の下に住せる蘭人はその家庭、その市の祭禮、その獨立を維がしめたる半は水に浸されたる土地唯一の富とし樂みとせる荒野、又はうるはしき群羊などを描くの外他に何等の望みなく、否な寧ろ描くの必要だになかりしなり。遮莫、自然がはじめてその有りの儘に描寫せられたるは實に和蘭を以て嚆矢とす。イタリイ派は描想の點に於て亦筆致の點に於て共に和蘭、フレミッシュ、フランスの諸派に及ばざれど、模倣力の優れたるの點に於て誇るに足るべし。これを代表するものはキイド、アルバノ、ドメニキイノ、ゲルチイノ、元氣湧躍せるサルゼトトル・ロサ、ベルニイニ等なり、是等に稍々先きだちて此世紀のはじめに物故したる此派の名士にポーロインニヤの三カラッチイ、ポール・ロニーザ、及ゼニス、のチレトレット等ありき。英獨の兩國は唯僅かに二三を出せるのみ、之に反してスペインには大才續出せり、就中大名あるはゴラスケッス、ムウリ、リベエラとす。佛國の畫家は慥に

その敵手を有したり、中には彼等よりも優りたる競争者あり、されど其彫刻家に到りては實に世界獨歩にして一人のこれと優を争ふものなかりき。げにベルニイを除きては全歐何處を求むるも有名なる彫刻家を求むること能はざりければなり。尤もイタリイの美術家中之を模倣したるものありしも、只その外觀を模したるに止まりて入神の趣致を寫す能はざりき。

十七世紀に於ける科學

文學はその郷土を有す、蓋しこは國民性を寫し、文士の特性を反影すればなり。されど科學は之を有せず、文學には佛國文學あり、伊太利文學あり、乃至亦英國文學あり、科學は到る處唯一にして又同一なり。只だ之が進歩に助むる人の志向の不同によりて處々の刺激を異にするのみ。國民性の差別は爰には必須要件にあらず、只第二位の興味に歸するのみ。

科學は文化の度を同じふする國に於ては殆ど差違ある事なしと雖も、一の世紀と他の世紀に於ては月窟の相違を來すものなり。古代と中世とは合理的科學の開拓には成功を告げたりと雖も、物理界の研究は全く荒野の中、一鋤をだに入れざりき、蓋し眞の實驗法未だ發見せられざりしかば、又已むを得ざるなり。抑も宇

宙は轉變恒なき任意の衝動によりて支配せられず、必ず恒久の知恵より出づる不變不易の法則によりて支配せらるゝものなることを人類の悟領するに到りてはじめて此實驗法は發見せられたるものなり。一旦之を悟領するや、天地創造の秘密をも窺はんとて恰かも野猪の如く急進突飛、敢て犯神と冒瀆とを顧みるに違あらざりき。

鍊金術、魔術、占星學乃至之に類する中世紀の有ゆる迷信に對しては、人々最早箇々に隔在したる現象に誘はれず、之を生ぜしめたるその法則を悟了せんと志したるその瞬間より變じて所謂科學となりぬ。即ちこの瞬間は十六世紀のコペルニカスに始まり、十七世紀は此大革新を完成し、ベイヤコンとガリレオとによりてその凱歌を唱へたるのみ。これ前者は革命の必要を布告し、後者は己が發見によりてその恩澤を證明したるなり。

この新發見の方法は初めより知識の全方面に應用することを敢てせざりき。まづ既に開墾せられたる科學たとへば數學、天文學等を特に選びて、之を攻究し次て之を一般に擴張せしめたり。かくして爰に科學的精神の剛健なる教育を施し

ぬ。この精神こそ次世紀の末にその紐をほとぎ、やがて十九世紀に至りてかの幾多の驚くべき科學を完成せしめたるものなり。

當世紀の科學的活動の中心となれるもの四人あり。その一はワルテムブルヒのジョン・ケプレル(一六三二—一六三〇)是なり。彼はコペルニカス説の眞理なることを論證し、次て惑星運動の根本的法則三を發見せり、其一に曰く、惑星の軌道は楕圓にして、太陽その中心の一を占む其二、惑星の動徑は等しき時間に等しき地域を經過す。其三、惑星が太陽の周圍を回轉する時の二乗はそが太陽との平均距離の三乗とに比例すと。

次はピサのガリレオ(一六〇二—一六四二)となす、彼は地動説を唱へたる科を以て一千六百三十三年邪教糾問所に繫獄され、次て引力の法則をも發見したり。振子、水秤、寒暖計、比例羅針儀等皆彼が發明になれり、望遠鏡に關してもまた概説したることあり。その高足、フエンザのトリセリイ(一六〇八—一六八二)は空氣の比重を發見し、第一期の晴雨計を構造し、また望遠鏡を完成せり。

次は英人ニュウトン(一六四二—一七二七)なり。彼は微分積分學を發見し、光線を分解し、光

學に關する根本法則を研覈し、宇宙間の引力を確證せり、こは實に世界體系を説明せるものなり。

最後の人は即ち吾人が上に既に紹介せる哲人ライブニッツなり。彼は微分學發見の前後に付きてニュートンとその光榮を争へり。

佛はデカアトとパスカルとを有せり、前者は數字に代ゆる代表記號を以つて略記法を發明したるがため、代數、立體幾何學に大利益を及したること實に尠少ならず、當時不可解と認められたる難問も之によりて恰かも兒童の戲謎を解くが如く易々として解決せられたり。猶彼が發見にかゝるもの光線の屈折に關する法則あり。彼はガリレオと等しく太陽を中心として地球の回轉するを信じたり。天才の誤謬は概して後代に好結果を齎らすを常とするが如く、彼が太陽及び恒星は恰も旋回花火の中軸の如く惑星をして自己の周圍を回轉せしむと説ける所謂花火旋回説は實に有名なるニュートンの引力説の萌芽を提供したるものなり。物理界の問題はデカルトに取りてもニュートンに於けると同じく一の機械的問題なり、而して此問題の解決にあらずとも、少くもその眞性質に付て世に教へたるもの

は實にデカルトを以て鼻祖となす。パスカルは僅かに歳十二にして幾何學の初步を書籍によらずして自得したりといふ、十六歳にして已に圓錐截面論の著あり、其後推算法を創定し、ブイ・ド・ドームの有名なる實驗によりて空氣の比重を證明せり、其他彼の考案創意になれる一種の荷馬車、及び水壓機等あり。

以上の傑人天才の下にむらがる名家は雲の如く蟬の如し、以下その有名なる者を列記すればツールウズ市會議員なるピール・ファルマア(一六五〇—)は當時の大數學者の内に算へらるべき人なり、尤も著書として世に公にしたるものなしと雖も、代數學を幾何學に應用したる點に付てはデカルトとその名譽を分つべく、最大最小公倍法を創意し、又パスカルと時を同じふして推算法を創見せり。アッペー・マリョット(一八六〇—)は一定の熱度にある瓦斯の容積はその壓力の度と反比例するを創説せり。デニイ・ババレは一千六百四十七年プロアに生る、彼は種々の機械を發明し若くは改良し、且つ動力として壓搾蒸氣を使用することを工夫したる元祖なり。またドイッのフルダ河に於て流を逆行する小蒸氣艇の實驗を試みたりしが、愚鈍なる艇手は誤て此の大物理學の大苦心になる蒸氣機關を破壊し了りぬ。かくて

彼は其後英國に航し、一千七百十年窮厄の内に倫敦にて逝けり。

地理學はニコラス・サムソン(一六六〇)及びジョー・ム・デリール(一七二六)によりてその生面を改めたり。二人の手になる地圖は現時猶ほ愛重せらる。ツウル・ニフォール(一七〇六)は植物學を改訂し、彼がレゾアント旅行によりて採集したる珍草異木は王立植物園を賑はせり。

コルベエルが佛國に迎へたる外國の三碩儒は各、その勳功を樹て王の好意に酬ひたり。即ち丁抹より來れるローマーは太陽の光線の速度に關して最も明確なる説明を試み、和蘭より來れるハイゼンズは土星に陪侍せる衛星の輪環並にその一を發見し、以太利より來れるドメニコ・カッシーニは更にその四星を發見せり。振り時計の發明は當然ハイゼンズの功に歸すべきものなり。カッシーニはフランス大學の天文學教授アッペ・ゼ・ピカアルと共に初めて地球測量の研究に従事しぬ。かくて彼等は一千六百六十九年子午線の弧線の測量に着手せり、こは遠く後代に至り、ルウシヨンによりて完成せられたるものなり。ニュートンが太陰をその軌道に保持せしむる引力に付て評價するを得たるは實にピカアルの設けたる尺度に

よるものなり。

英國には對數表の發明を以て有名なる蘇國人ジョン・ネーピア(一六一七)反、射鏡の發明を以て名あるゼエムス・グレゴリー(一七五三)ゼエムス一世並にチャヤアルス一世の朝に奉仕したる侍醫にして一千六百二十八年血液循環論を以て有名なるハアズ(一六五七)等あり、其の他天文學者として倫敦のハルレー(一六五八)は彗星の回期を豫言したるを以て名を成せり。アイルランド人ロバート・ボイル(一六二六)は排氣ポンプを完成したるを以て有名なる科學者にして、亦倫敦の王立學士會院建設者の一人として名あり。

オランダは海牙のハイゼンズ(一六二九)を出し、又動物の流動質を分解することをはじめたる醫師ブウル・ハアザ(一七三八)を出せり。

スウィツルの科學界はバルヌイ兄弟によりて代表せらる、即ち兄ジャック(一六〇五)は微分積分法を實用したる元祖、弟ジョン(一七四八)は幾何學者として又物理學者として榮名不朽に傳はれるものなり。

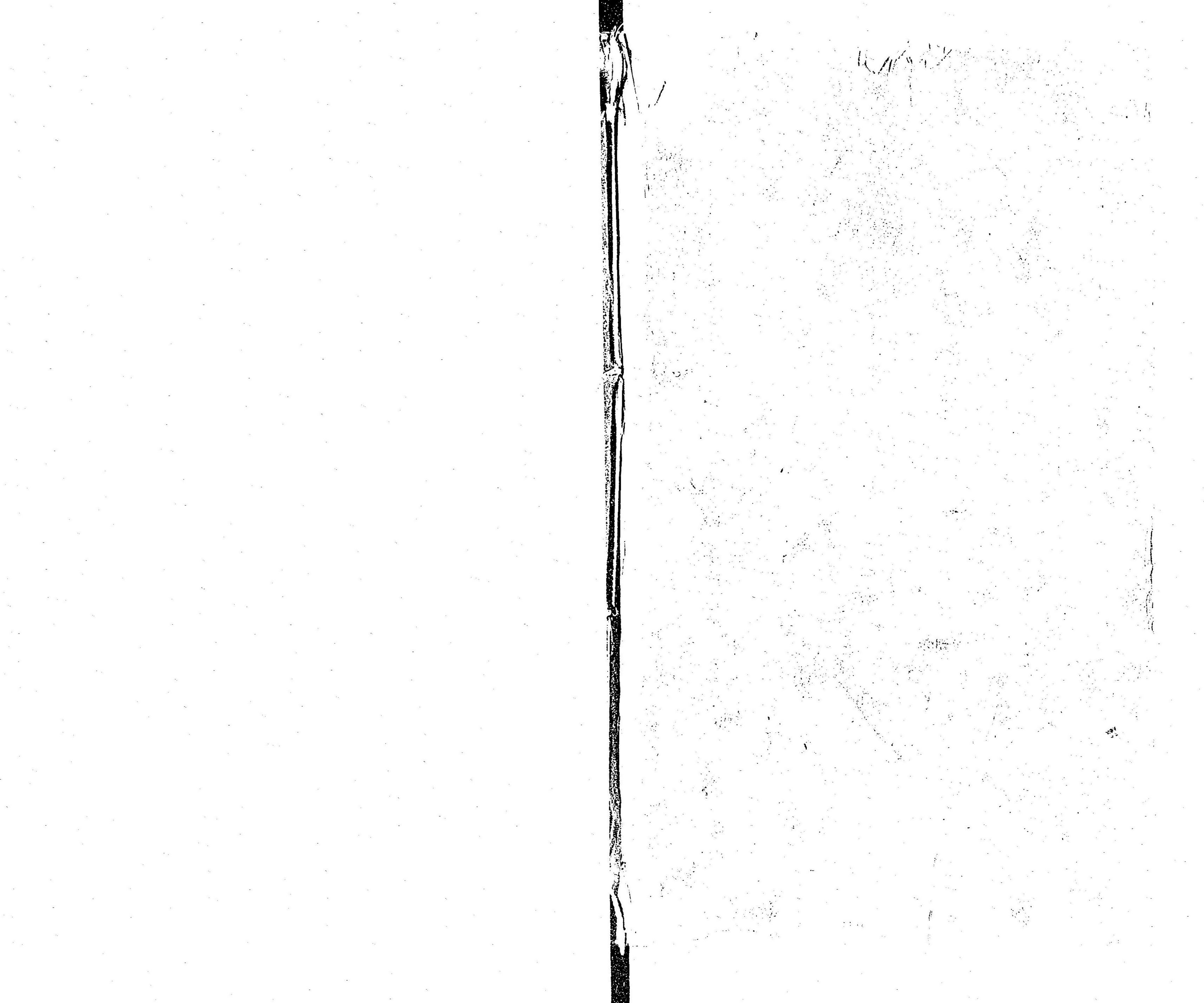
之を要するに當世紀中かりにイタリイは己が自ら迫害したりしガリレオを出

さざりしとせんか、はたゼルマンは彼が光榮とする二大天才即ちその一生を窮迫の内に終りたるケブレル及ブライブニッツを有せざりしとせんか、此兩國は正しく智的闇黒の中に過ぎたりしなり。スペインは恰かも倒産の中より僅に二三の寶玉を餘し得たるクロサスの如く、數人の畫家と三名の文士との傳ふべきものを遺したるのみ。されど英佛の兩國は既に武力的優勝の競争を終りて今正に文華爛熳の黄金時代に際せり。特に佛は近世文化の首座を占め、全歐の美術文學界に於ける優越なる覇權を握りぬ。

西洋近世史終

62

399



62
399

學三十八年度

理科第一學年講義錄

水口鹿太郎

310508-000-0

62-399

西洋近世史

水口 鹿太郎 述